平成30年度 全国学力・学習状況調査の結果について(公表)

塩尻市教育委員会

1 趣 旨

本年4月17日に実施した「平成30年度全国学力・学習状況調査」について、国及び県の調査結果の公表があり、これに基づき、本市の結果を分析しましたので、その概要をお知らせするものです。

2 調査の概要

(1) 調査の目的(文部科学省)

全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

(2) 調査の対象学年と実施した学校数・児童生徒(小中学生)の人数

対象学年	対象学校数	学校数 (実施率)	実施人数
小学校第6学年	9	9 (100%)	568 人
中学校第3学年	G	6 (100%)	EQO A
(両小野中学校を含む)	小野中学校を含む) 6	0 (100%)	580 人

(3) 調査の事項及び手法

ア 児童生徒に対する調査

- ① 教科に関する調査(国語、算数・数学、理科)
 - ・国語、算数・数学はそれぞれ「主として『知識』に関する問題」(A)と「主として 『活用』に関する問題」(B)を出題。
 - ・理科は「主として『知識』に関する問題」と「主として『活用』に関する問題」を一体的に出題。
- ② 質問紙調査

学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する質問紙調査を実施。

イ 学校に関する質問紙調査

学校における指導方法に関する取組や学校における人的・物的な教育条件の整備の状況 等に関する質問紙調査を実施。

3 調査結果

(1) 教科に関する調査結果の全体概要

- ア 小学校第6学年は、国語 $A \cdot B$ 、算数 $A \cdot B$ 、理科それぞれにおいて、全国及び県平均 正答率を上回る結果でした。特に国語 $A \cdot B$ については大きく上回りました。
- イ 中学校第3学年は、国語A・B、数学A・B、理科それぞれにおいて、全国及び県平均 正答率を上回る結果でした。
- ウ 国語、算数・数学については、全国の傾向と同様に、「主として知識に関する問題」(A)は、「主として活用に関する問題」(B)より、平均正答率は高い結果となっています。

(2) 各教科の調査結果と今後の対応

ア 小学校 (国語)

「国語A」の調査結果を見ると、基礎的・基本的な知識・技能はどの分野もよく身に付いていると言えます。特に、「話すこと・聞くこと」については、定着が進んでいるものと考えられます。しかし、「主語、述語との関係に注意して書く」については、正答率が低く、言語についての理解を定着させる必要があります。

「国語B」の調査結果を見ると、「話し合いにおいて、司会者の役割や質問の意図をとらえる」など話すことや聞くことにおいて高い活用力を身に付けています。今後は、「目的や意図に応じ、内容の中心を明確にして書くこと」等、書くことについての活用力を一層高めていくことが望まれます。

イ 小学校(算数)

「算数A」の調査結果を見ると、「量と測定」の知識・技能などについては、概ねよい定着を示しております。少数や円周率の意味の理解についてはきちんと定着させる必要があります。

「算数B」の調査結果を見ると、「数量関係」の問題には課題が見られましたが、「数学的な見方・考え方」について、いずれの領域においてもバランスよく力を付けてきていると言えます。今後は、与えられた情報をもとに、数や量の関係を捉えたり、関連付けて考えたりする学習に力を入れていくことが望まれます。

ウ 小学校(理科)

「理科」の調査結果をみると、どの分野も知識に関する内容は定着が進んでいます。「実験結果を分析し考察し、記述する」など、科学的な見方や表現力を一層高めていくことが望まれます。

エ 中学校(国語)

「国語A」の調査結果を見ると、各領域の基礎的・基本的な内容は概ね身に付けていると言えます。読むことに課題があるので、説明的な文章について、段落ごとの内容を正しく読み取る力を定着させていく必要があります。

「国語B」を見ると、「聞くこと・話すこと」の活用力は概ね良好な状況ですが、「目的に応じて文章を読み、内容を整理して書く」ことなど書くことに課題が見られました。今後は、相手の意見や考えに応じて、自分の考えが伝わるように話したり書いたりするなど総合的な力を高めていくことが望まれます。

才 中学校(数学)

「数学A」の調査結果を見ると、「数と式」「図形」の基礎的・基本的な内容について概ね理解できていると言えます。しかし、「一次関数の意味理解」など「関数」については、課題があるので、操作活動や体験的な活動を通して定着させる必要があります。

「数学B」を見ると、同じ領域でも問題によっての正答率が大きく異なっていました。「与えられた情報から必要な情報を選択し処理する」「数学的な表現を用いて説明する」など、資料を活用しながら、数理について理由を説明したり記述したりする活動に粘り強く取組むことが望まれます。

力 中学校(理科)

「理科」の調査結果を見ると、「生物的領域」や「地学的領域」の学習の定着がすすんでいます。基本的な知識の定着が不十分な問題もありましたので、確実な定着を図る必要があります。

(3) 児童生徒質問紙調査結果から

- ア 塩尻市の市民運動「早ね 早おき 朝ごはん・どくしょ」の観点から
 - ・質問番号(7) 朝食を毎日食べているか
 - ・質問番号(8) 毎日、同じくらいの時刻に寝ているか
 - ・質問番号(9) 毎日、同じくらいの時刻に起きているか
 - ·質問番号(15) 平日の読書時間

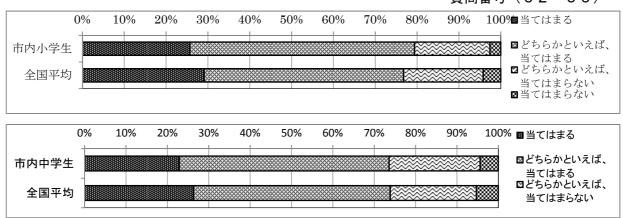
上の4つの調査結果をみると、「朝ごはん」については、「している」「どちらかといえば、 している」は小学生96%、中学生93%であり、良好な状況です。「早ね」については8 割以上、「早おき」については、9割以上の児童生徒がだいたい決まった時間に寝起きして おり、規則正しい生活習慣ができています。

平日の家庭での読書時間は、「30分以上」で見ると、小学生46.5%(全国41.1%)、中学生37.2%(全国30.9%)であり、全国に比べ、 $5\sim7\%$ ほど高くなっています。各学校での一斉読書や市立図書館・分館や地域との連携した読書の取り組みが、定着してきていることが分かります。

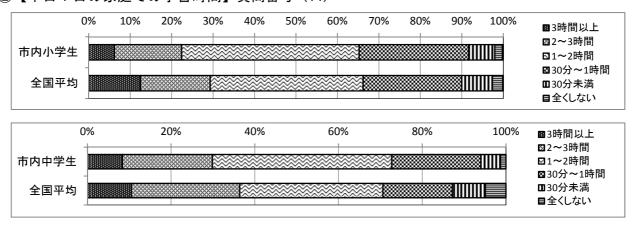
イ 学習に関する観点から

①【授業では、課題解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいますか】

質問番号(52・55)



②【平日1日の家庭での学習時間】質問番号(14)



授業の課題に対して主体的な取組みについては、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」が、小学生79.4%(全国76.7%)、中学生73.6%(全国73.8%)でした。小学校は全国に比べて高く、中学校はほぼ同じ結果でした。教師から示される課題や、学級やグループの中で、自分たちで立てた課題に対して、自分から考えて取組む主体的

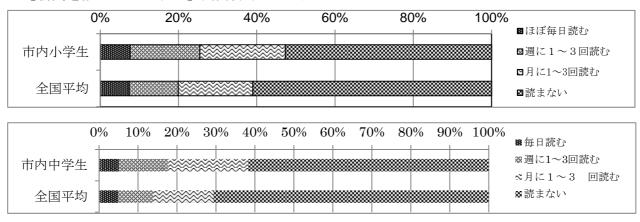
な姿勢の児童生徒が多いことが分かります。

平日の家庭学習の時間は、小中ともに1時間から2時間が最も多く、家庭学習1時間以上の児童生徒は、小学生65.2%(全国66.2%)、中学生72.8%(全国70.6%)でした。全く家庭学習をしない児童生徒の割合は小学校1.8%、中学校1.3%で共に全国より少ないですが、引き続き家庭と協力して支援をしていきます。

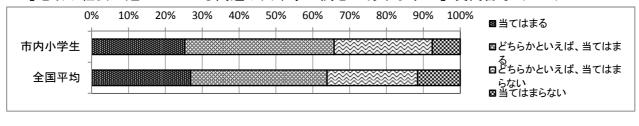
ウ その他の観点から

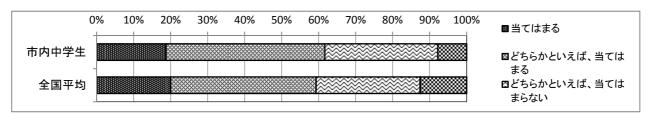
① 地域や社会との関わり

【新聞を読んでいますか】質問番号(25)



【地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がありますか】質問番号(21)

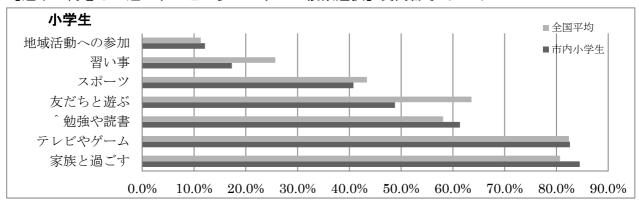


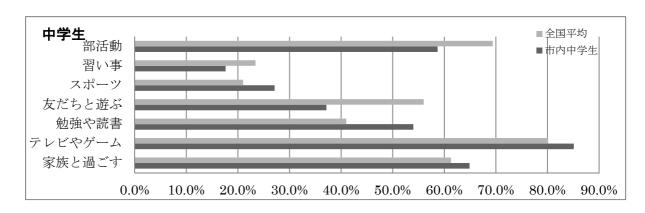


新聞を読む児童生徒の割合は、全国より高い数値を示しており、地域や社会で起こっているできごとへの関心については、「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」が、小学生65.7%、中学生61.5%であり、全国と比べて、小中学生ともに2ポイントほど高くなっています。地域や社会で起こっている出来事への関心が高いほど、学力も高い傾向が見られますので、新聞やインターネット・テレビのニュース番組を見る時間を今後も増やしていくことが望まれます。

② 家庭生活

【週末に何をして過ごすことが多いですか 複数選択】質問番号(17)





休日の過ごし方については、小中学生ともに、テレビを見たりゲームをしたり、学習をしたりして、家で過ごすことが多いことが分かります。一方、家族と過ごす時間の割合が高いものの、「友だちと遊ぶ」については、小学校48.8%(全国63.6%)中学校37.1%(全国56%)と全国と比べて少ない状況でした。「習い事」や「部活への参加」の割合も全国よりやや少ないので、休日も友だちと遊んだり、家から出ていろいろな活動に参加したりすることも大切に考え、奨励していくことが望まれます。

4 学校に関する質問紙調査結果から

(1) 教科指導

ア 「授業では、課題解決に向けて、自分で考え、自分から取り組むことができていますか」 の問いに「そのとおりだと思う」「どちらかといえばそう思う」の合計が、小中学校ともに 80%を越えており、児童生徒が課題をもって取組む授業の実践が進んでいます。また、特別支援教育についての研修や元気っ子応援事業を通して、一人ひとりの子の理解を深めていることもあり、小学校では児童生徒の特性に応じた指導・支援の工夫が行われています。

項目	小学校	中学校
〈学校質問番号 (52) (50) >	88.9%	20%
教員は、特別支援教育について理解し、授業の中で、子どもの特性に応じ	全国平均	全国平均
た指導上の工夫(板書・説明の仕方・教材の工夫等)を行いましたか	40.4%	4 1 %

※数値(%)は、「よく行った」の割合

イ 学校では、電子黒板、プロジェクターなどICT機器を活用した授業の日常化を目指していますが、使用については職員の個人差が大きいです。機器を有効に活用することで、児童生徒が興味を持って学習に取り組み、内容の理解も向上しています。

項目	小学校	中学校
〈学校質問番号(28)〉	4 4 %	6 0 %
教員が大型提示装置、電子黒板等のICTを活用した授業を1クラスあた	全国平均	全国平均
りどの程度行いましたか	3 2 %	3 6 %

※数値(%)は、「ほぼ毎日行った」の割合

(2)教育課程編成

どの学校でも、編成した教育課程について、実施、評価して改善するなどのPDCAサイクルが確立しつつあります。そして、自校の全国学力・学習状況調査や他の学力調査の結果を分析し、学校全体で成果や課題を共有し、改善の具体策を考え実行しています。また、地域の資源や、地域の人材を授業で活用しながらよりよい授業ができるように改善を図っています。

項目	小学校	中学校
〈学校質問番号(18)(17)〉	55.6%	40.4%
調査や各種データ等に基づき、教育課程を編成し、実施し評価して改善を	全国平均	全国平均
図る一連のPDCAサイクルを確立していますか	34.8%	30.7%
〈学校質問番号(19)(18)〉	66.7%	40.4%
指導計画作成に当たっては、教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資	全国平均	全国平均
源等を、地域等の外部の資源を含めて活用しながら効果的にくみあわせて	41.7%	26.1%
いますか		

※数値(%)は、「よく行った」の割合

(3)地域との連携

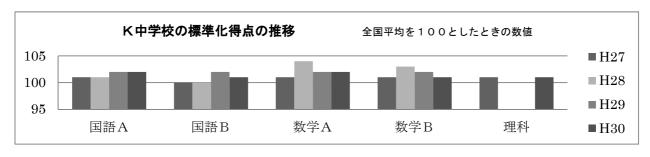
授業等で地域の人と関わり、地域について学ぶ学習が小学校では積極的に行われています。 また、コミュニティ・スクールの仕組みを生かして、長期休業中の学習支援や総合的な学習の 時間での地域活動など地域と協働とした活動も昨年度より増えてきています。

項目	小学校	中学校
〈学校質問番号(57)(55)〉	55.6%	20%
授業や課外活動で、地域のことを調べたり、地域の人と関わったりする機	全国平均	全国平均
会の設定を行いましたか。	33.2	27.9%
〈学校質問番号(61)(58)〉	77.8%	4 0 %
コミュニティ・スクールなどの仕組みを生かして、保護者や地域の人との	全国平均	全国平均
協働による活動を行いましたか	3 4 %	22.1%

※数値(%)は、「よく行った」の割合

5 K中学校の学力向上に向けた取組みより

K中学校の全国学力・学習状況調査の教科得点は下のグラフのように、平成27年以降全国 平均を上回っております。どのような取り組みで成果を上げているのでしょうか。



☆標準化得点 全国平均を 100 とした時の数値

(1) よい生活習慣や学習習慣を身につける

K中学校の生徒質問紙の回答をみると「生活習慣や学習習慣が身についている」と答える 生徒の割合が他校よりかなり高いです。先生方に聞いてみても「生徒が落ち着いており、学 習への姿勢がよい」と評価しています。また「教師が大きな声を出すこともないし、教師と 生徒の関係もいいと思う」と語っていました。小学校からの指導を受け継ぎ、家庭と連携し ながら、学校全体で学びに向う学習習慣を整えていることが、学力向上の基盤になっている と感じます。

(2) 重点をはっきりさせた日常の授業実践と評価

K中学校は「対話的な学びを通して、主体的に社会と関わる力の育成」を目標に日常の 授業を行っています。その中で特徴的なことは、

ア 毎時間、授業の終末に見返しをする

生徒アンケートでは「授業の見返しをきちんとしている」と答えた生徒が80%を上回るようになってきました。各教科で育てたい資質や能力に沿って、今日の授業のめあてをはっきりと示し、課題やめあてが達成できたかを自己評価しています。体育の授業でも筆記用具を持参し、1時間の見返しを記入するなど全教科で授業の振り返りを行っています。

イ 思考力や判断力を評価できるテスト問題の作成

生徒は「K中のテスト問題は難しい」と言っています。単なる教科の知識や理解だけでは、解けない問題があるからです。職員は育てたい力に沿って、知識だけでなく課題解決力や活用力が伸びているかが評価できるテスト問題を工夫しています。

ウ 一斉授業からの脱却

教師が主導する一斉授業だけでなく、「この問題は グループで相談して考え答えをだしていこう」など、 子ども同士の関わり大切にする学習、学び合う学習を 多く取り入れるようになってきました。生徒が活躍で きる場を授業の中で多く設定できるような取組みを しています。



〈グループで学び合う中学2年 社会〉

(3) PDCAサイクルを回す職員体制

本年度は外部の講師を招いて研究授業や研修を各教科一回以上はやろうということで、計14回の研修会や研究授業が計画されています。職員が「こんな授業にしたい」という自己課題をもとに研修を深めよりよい授業を目指しています。同時に、NRT検査や学力学習状況調査の結果を職員会や教科会、学年会で共有し、日常の授業の指導に生かしています。若い職員もベテランの職員も自分の視点から学び合い、見返しをしていくことで、向学の気風がある教師集団となっています。

(4) あたりまえのことがあたりまえにできる

「学力向上のために、コミュニティ・スクールの協力を得て学習支援をしたり、カリ勉タイム(自主学習の時間)を設けたりしています。ただ、本校は『あたりまえのことがあたりま

えにできるようになること』を生徒も 職員も共通のベースとし、すべての教 育活動に取組める強みがあります」「国 語や数学への取組みだけでなく、美術 や技術家庭科などの作品を見てください。どれも真剣に学んでいる姿が表れ ています」このようにK中学校の校長 は語っています。「あたりまえのことが あたりまえにできること」を生徒、教 師の共通した目標として、目の前の 動を精一杯取組んでいく姿勢がK中学 校にあると感じます。



〈スカイブリッジ 中学2年生作品〉

6 今後の取組み

K中学校は、きちんとした学習習慣の上に教師と生徒がよい関係を築き、支え合える学級集団をつくっています。そして、全職員が学校の重点に沿って指導方法を改善していくPDCAのサイクルの中で、学力が向上してきたと考えられます。この実践に学びながら本市の「一人ひとりの育ちに、ていねいに向き合う教育」を基本理念とし、次のことを大切に取組みたいと考えています。

(1) 教員の指導力向上と授業改善

- ア 授業のはじめに「目標(めあて・ねらい)を示す」活動や、授業の終わりに「学習を振り返る」活動を位置づけるなど、児童生徒が主体的に学べる授業の形を定着させ、どの教室でも確かな学力が身につく授業が展開されるよう一層努めてまいります。
- イ 活用力の向上を図るために、ここ数年間、日常生活に関係付けた学習問題を設定したり、 資料を用いて説明したりする学習活動を重視してきました。本年度の調査結果を見ると、 記述式の問題の正答率が全国より高いなど、成果が表れてきています。今後も教科学習の 中で、基礎・基本の定着を図るとともに、「自分たちで課題を立て、その解決に向けて情報 を集め、学級やグループで話し合いながらまとめ、発表する、記述する」などの主体的、 対話的な学習活動を一層充実させてまいります。

(2) 塩尻市の重点施策を活かした生活の基盤づくり

塩尻市が推進している「早ね 早おき 朝ごはん・どくしょ」の市民運動に基づく様々な取組が、小中学生の規則正しい生活や読書時間の割合の高さとなって表れ、教科学習の土台を支えています。今後も子どもたちが、家族の一員として家庭での役割を果たしたり、遊びやゲーム、読書等の時間をバランスよく配分したりする、自立的な生活づくりが進むよう保護者と協力して家庭生活を充実させてまいります。特に家庭学習については学校と家庭が共通理解の上に支援をしてまいります。

(3) 元気っ子応援事業を核とした個に応じた支援

個に応じた育ちを応援していく「元気っ子応援事業」とともに歩んできた子どもたちが高 等学校に進学しています。学校質問紙では、市内全小中学校が「調査対象学年の児童生徒は、 授業中の私語が少なく、落ち着いている」「個に応じた指導を工夫している」と回答していま す。これからも、自尊感情を育み、個々が持っている力がさらに伸びるよう「元気っ子応援 事業」を推進します。また、担任と市単独加配教員や支援員との連携によるティームティー チングや少人数学習、個別学習などの指導についても、改善を図りながら継続してまいりま す。

(4) コミュニティ・スクールを生かした体験的・課題解決的な学習の充実

学校運営協議会の活動が活発になり、学校支援ボランティアによる学習支援や長期休業中の学習支援も増えてきています。学校支援コーディネーターとの連携を密にし、地域の力を借りながら、自らによりを見からいても実のあるものにしていきます。



〈ボランティアによる長期休業中の学習支援〉

(5) 小中一貫した指導内容・方法の研究

新学習指導要領では、英語が教科として小学校に位置づくこともあり、小中の連携を考えた指導実践が行われるようになってきました。英語に限らず、小学校と中学校で指導の隙間を生み出さないよう、中学校区毎に児童生徒理解を深め教育目標を共有しながら、9年間の系統的な指導内容・方法について検討し、一貫性のある教育の推進に努めてまいります。